

中国農村部における椅子と生活文化のかかわりに関する研究 －伝統的な椅子文化の比較調査を通して－

主査 石村 真一^{*1}

委員 車 政弘^{*2}, 石丸 進^{*3}

本研究の目的は、中国農村部で使用される伝統的な椅子が、地域の生活文化とかかわり、いくつかの生活形態に関する規範を形成した可能性を、調査によって検証することにある。中国の調査は、四川省成都市、貴州省凱里市、陝西省漢中市、湖南省邵陽市の4ヶ所で実施した。調査の結果より、低い腰掛けと低い卓子の組み合わせは、山間部の一部に限られた。殆どの地域では高さ50cm程度の腰掛、80cm程度の卓子を伝統的に使用してきたが、近年は欧米の標準寸法に移行している傾向が認められた。

キーワード：1) 中国農村、2) 椅子文化、3) 木材加工、4) 竹材加工、アノニマスデザイン

A RESEARCH ON THE RELATION BETWEEN LIVING CULTURE AND CHAIRS IN THE CHINESE COUNTRYSIDE － Focusing on Forms and using way of Chairs －

Ch. Shinnichi Ishimura

Mem. Masshiro Kuruma and Susumu Ishimaru.

The purpose of this research is to examine if the traditional stools and chairs that are used in the Chinese countryside maybe a formed model that is related to some living forms, and the living culture in the region. The study was conducted at the following places: Sichuan province Chengdu, Guizhou province Kaili, Shanxi province Hanzhong, Hunan province Shaoyang. According to the result of research, the combination of a low stool and low table was limited to a certain part of the mountainous area. In the whole region, the stool 50cm high, and the table 80cm high were used in a traditional way. However recent a trend are observed which shows a change to western standard sizes.

1. はじめに

中国の椅子に関する研究は、これまで貴族階級が使用した明式家具を中心とする上手のものに限られていたようである。確かに、絵画資料に描かれた椅子、伝世された椅子の類は、宗教的な一部のタイプを除けば、唐代より高級なものが多数を占めている^{※1)}。

しかしながら、中国における椅子の使用は、貴族階級だけに使用されていたというわけではなく、庶民の日常生活においても成されていた^{※2)}。但し、この場合においても、椅子の使用は都市社会に限られており、農村の生活場面に関する研究事例報告は極めて少数である。

現在、中国国内で販売されるダイニング用椅子と机類は、我が国と同様に椅子40～43cm、卓子68～73cm程度に統一されている。こうした規格は、当然標準化が進行したためであり、地域の作り手と使い手が長年継承してきた生活文化の集積とは言い難い。つまり、近代デ

ザイン運動が当初一つの指標として掲げた標準化が中国全土に浸透したため、均一な寸法のダイニングセットが普及したにすぎない。

本研究の目的は、近年の標準化によって形成された都市部の椅子文化は直接対象とせず、農村地域において長く継承されてきた椅子を基軸とした坐文化を、調査により特定化することにある。

2. 研究の方法と調査地域の設定

これまでの予備調査^{※3)}により、陝西省、江蘇省、浙江省、湖南省、四川省、福建省、広東省、雲南省の農村部で使用される坐具の素材は、木製と竹製に大別された。また、形態は背もたれのあるタイプとないタイプとがあることが確認された。このことから、本研究では、フィールド調査によって、材料、形態、構造、使用方法について詳細に考察する。

*1 九州芸術工科大学 教授

*2 九州産業大学 教授

*3 福山職業能力開発短期大学校 教授

調査地域の選定については、伝統的な農村の生活文化を継承していることを一つの条件とした。但し、少数民族の生活地域に限定するような極端な高地、僻地というのではなく、都市の中心から 100km 程度離れた地域までとした。さらにそうした条件の中でも、平地と山地という二つの生活実態をそれぞれ調査することとした。

上記の条件を検討した結果、最終的に調査地を下記のように決定した。

- ①貴州省凱里市郊外
- ②四川省成都市郊外
- ③陝西省漢中市郊外
- ④湖南省邵陽市郊外

①～④を地図上に示したものが図2-1である。

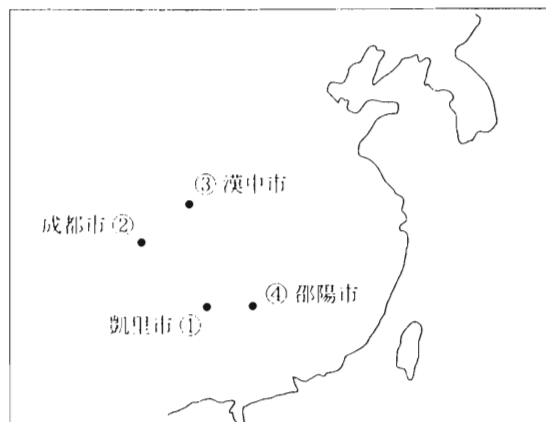


図2-1 中国の調査地

3. 貴州省凱里市郊外における椅子文化

3.1 地域文化の特徴

凱里市は貴州省の省都貴陽市から東北東に約 200 キロに位置する。周囲の山は標高 1000m 前後で、特別急峻というわけではない。農業は米作が主で、標高が高くなるにつれて写真3-1に示したような棚田が多くなる。山地の農村では、少数民族の苗族が多数を占める。本調査では、凱里市郊外、雷山県の山地に位置する農家を対象としたことから、すべて苗族の家庭となった。

苗族の家は、写真3-2に見られるように、木軸構造を基盤としており、丸太材を多用していることが一つの特徴となっている。集落の形態は密集型と分散型の2種類が認められる。農家の座具調査を通して見る限り、密集型の集落の方が、古い生活様式を強く残しているように思われた。



写真3-1 山間地の棚田（凱里市郊外）

3.2 凱里市郊外の農家で使用される座具

座具は次のように分類される。

- 1)石材を利用したもの（高さ 20 ～ 30cm）
- 2)木材を利用したもの
 - ・腰掛け（座面の高さ 20 ～ 35cm）
 - ・椅子（座面の高さ 30 ～ 40cm）
- 3)竹材を利用したもの
 - ・長椅子（座面の高さ 30 ～ 35cm）

1)の石材を利用したものは、写真3-3に示したような玄関脇におかれる石の腰掛けである。どこの家庭でも置かれており、その数は概ね 1 ～ 5 個程度である。仕事の休憩時、夏の夕涼み等に利用され、子供の遊び場にもなっている。

2)の木材を利用したものが最も多く、写真3-4のように腰掛けと椅子の両方を使用している場合と、腰掛けのみを使用している場合がある。背もたれのある椅子は、腰掛けより後に作ったか、他地域より購入していることが多い。また、両方使用する場合であっても、腰掛けの



写真3-2 苗族の家（凱里市郊外）



写真3-3 石の坐具（凱里市郊外）

数が椅子の数に対して多いことから、腰掛けを使用した生活文化の方が古いようである。稀に長椅子を所有している家庭も見られるが、購入した時期はいずれも近年であり、1950年以前に遡るものではない。

3)の竹製の座具は、殆どが写真3-5に示した長椅子である。中国で広く認められる一人掛けの椅子は、苗族の生活では見当たらない。1)、2)の座具が家庭内で製作されるのに対し、写真3-5に示した長椅子は、村で定期的にかれる市で購入したものである。つまり、他地域で製作された商品を購入しており、その製作地域は少なくとも近隣の農村部ではない。その根拠として、大型竹の植生が山地の農村には存在しないことを挙げることができる。貴州省の山地は、温暖な気候で雨量も多いが、竹を栽培する習慣が認められない。隣接する湖南省は竹の産地であり、竹の加工製品の生産が盛んであるのに、貴州省の山地では、何故か積極的に大型の竹類を栽培しないのである。つまり、大型の竹を栽培して加工するという生活習慣が定着していないということになる。

木製の座具は、農家では写真3-6のような方法で使っている。問題となるのは、椅子の高さより卓子が低く、さらに細い輪状の形態をしていることである。

写真3-6の机は、半円状の卓子を二つ合わせて一体とするもので、他にはL字状の卓子を二つ合わせて直方体または正方形とするタイプも認められた。こうした二つのパーツを一体化する目的は、使用人数によってスペースを増すことにある。即ち、写真3-6のような使用法は、少数の来客があった時に限られているのである。それにしても、卓子が輪状であることは、一人あたりの使用面積が少ない。その理由は、食事に使用する器の数にある。一人に二つの碗が標準なら、こうした少ない面積で対応できるのである。食事の方法が、少数民族固有のものであるかについては今後の課題とするが、低い腰掛けと低く面積の少ない卓子で生活を営む文化が、貴州省の山地で広く展開していることは事実である。

写真3-7は、別の農家で葬式の後に親戚一同で食事している場面である。ここで使用される腰掛けは、写真3-6と似た高さであるが、卓子の方は腰掛けと似た高さになっている。また、形状は輪状であるが、面積が増している。写真3-6が少数の来客用、写真3-7は多人数の来客用というように、2種類の食事方法が認められた。

腰掛けの数は、多い家庭で20程度で、それ以上の来客がある場合は、隣家より借りてくるのが一般的な習慣である。

坐具ではなく、建築の一部に付加された坐の空間として、美人椅と称する写真3-8のような屋外に面した部分がある。これも農家における坐文化として位置づけられよう。但し、写真3-8はすべての苗族が共有する文化でもなく、木製の腰掛けとはやや質が異なる。



写真3-4 木製の坐具（凱里市郊外）



写真3-5 竹製の坐具（凱里市郊外）



写真3-6 食事風景（凱里市郊外）



図3-7 食事風景（雷山県）

3.3 まとめ

貴州省の山地に生活する苗族が室内で使用する坐具は、20～30cmの木製腰掛けが主体である。背もたれのある木製椅子も少数認められるが、この高さも30～35cmと低い。竹製の坐具は少数認められるものの、他地域で製作されたものを購入しているにすぎない。腰掛け類は、基本的にすべて家庭で製作している。

腰掛け、椅子とセットにして使用する卓子類の高さも低く、20～30cm程度のものが多い。低い腰掛けと低い卓子という組み合わせで食事をしている。

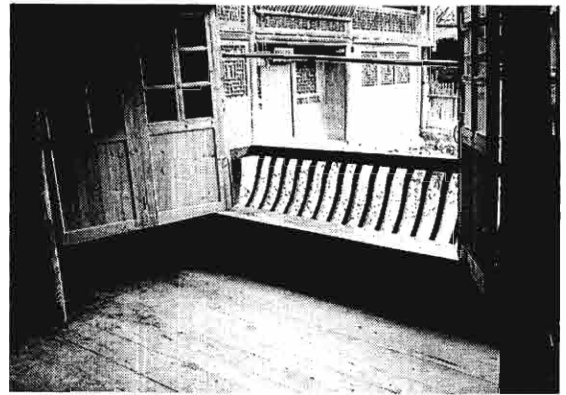


写真3-8 美人椅（凱里市郊外）

4. 四川省成都市郊外における椅子文化

4.1 地域文化の特徴

成都市郊外の農村では、写真4-1のような日本の屋敷林に似た景観が認められる。土地のガイドの説明では、成都市を中心として半径35kmの地域で見られる現象ということであった。屋敷林は、広葉樹灌木、竹、針葉樹、大型広葉樹で構成されている^{※4)}。これだけの規模を持つ屋敷林は、管見の限り成都市郊外しか見当たらない。

貴州省の山地で見られた植生と異なるのは、竹類の栽培が盛んな点である。そして、竹の利用が地域の生活文化の重要な構成要素となっている。

成都市及び郊外の農村は大半が漢民族であり、今回の調査対象とした農家はすべて漢民族である。



写真4-1 屋敷林（郫県）

4.2 成都市内で使用される椅子

成都市内で見かける日常用の坐具は、写真4-2のような竹製の椅子が多数を占める。四川省自体が竹の産地であることは周知していたが、予想以上に竹が椅子材として利用されている。

成都市内の食堂で見かける代表的な椅子は、写真4-3、写真4-4のタイプである。写真4-3のような木製の椅子は、上海市、長沙市のような大都市で普及していることから、都市型食堂用椅子の定番ということもできる。ところが、先に示した写真4-3と同類の写真4-2のような竹製の椅子は、やや高級な食堂には使用されない。竹製の椅子が使用されるのは、日常生活の延長上に位置する大衆食堂に集中する。写真4-3、4は同じ食堂に置かれているが、麻雀台と兼用にされているのは写真4-4の竹製椅子だけであった。

竹製の椅子は、木製の椅子に対して廉価である。そうした経済性が日常に使用する習慣と深くかかわっているのかもしれない。

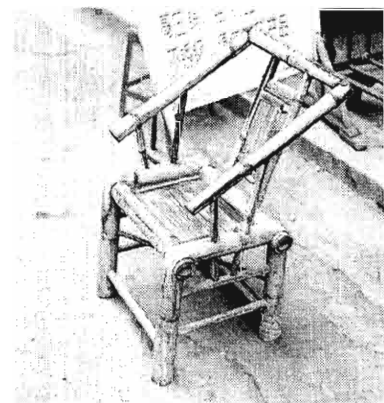


写真4-2 竹製の椅子（成都市内）

4.3 成都市近郊の農家で使用される坐具

成都市の中心部から20～25km離れると、農村の風景が目立つようになる。調査に訪れる農家は、外観が伝統的な土壁で、平屋建てを条件とした。

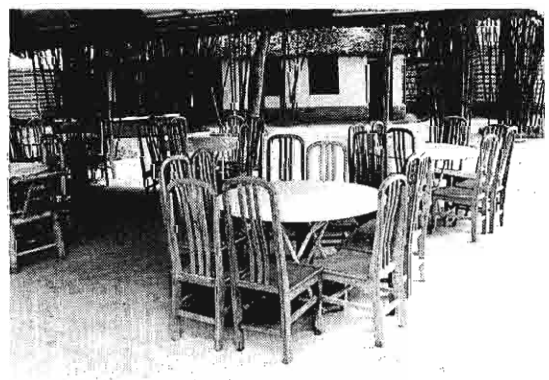


写真4-3 木製の椅子（成都市内）

写真4-5は、成都市の中心部から 100km 程度の距離に位置する農家の食卓セットである。竹製の椅子の高さは 40cm 程度で、卓子の高さは 65～68cm である。椅子、卓子の高さは、先に示した写真4-4とほぼ同じであることから、形態と寸法は都市で展開する標準化された製品とよく似ているということになる。

写真4-5の家庭では、現在使用されていないが、写真4-6のような古い椅子が大切に保存されていた。椅子の座面は高さが 53cm もあり、都市部を中心に使用される椅子の高さより少なくとも 10cm 高い。写真4-6の椅子は、成都近郊の農村部に広く分布し、清代後期に作られたと言い伝えられているものも少なくない。中国共産党による新たな社会体制が確立される以前の生活では、写真4-6のような椅子を備えている家庭は、少なくとも中流であり、そうした過去のステータス性を示す家具類であつたればこそ、長く保存していたのであろう。

写真4-7は、旧体制では地主をしていた農家の食卓セットで、現在も使用している。腰掛けの高さは 50cm 以上、卓子の高さは 80cm 程度となっている。来客がある時は写真4-6のような椅子を使用した食事風景が、革命前における富裕農民の生活であつたと思われる。

写真4-6、7はいずれも木製であるが、写真4-7の腰掛けも含め、多少の差こそあれ、写真4-8のような3段階の高さを持つ木製の腰掛けが多くの農家で認められた。現在は竹製の椅子を使用しているが、元々は概ね写真4-8の腰掛けが農村生活の基盤となっていたようである。背もたれのある椅子類は、来客用のタイプを除けば、殆ど使用されていなかったのである。

4.4 成都市郊外における竹製椅子の普及時期

竹製の椅子は、農家の聞き取り調査によると、1990年以降に導入されているにすぎない。確かに、1940年代より竹製の椅子自体は、成都市周辺にも少数存在はしたが、一般には普及していなかった。では何故1990年代に至って竹製の椅子が普及したのかということになるが次のような理由と推測する。

- ①腰掛けより椅子が農村でも好まれるようになる。
- ②竹製の椅子が廉価であるため、農村に普及する。
- ③都市部で竹製の椅子が流行し、農村部にも広まった。

成都市内における椅子の需用が拡大したため、木材の不足により、大衆文化として価格の安い竹製の椅子が流行するようになり、やがてその流行が農村部にも拡散したと推定するのである。そこには、背もたれの椅子が持つ都市文化のステータス性と、座面の高さが示す中国国内の標準化が深く関与していると考えられる。

成都市及び近郊の農村に見られる竹の椅子の普及を、簡単に坐具の近代化と位置づけるのは性急という意見もあるだろうが、近年急速に普及したという現象は、やはり近



写真4-4 竹製の椅子（成都市内）



写真4-5 竹製の椅子の使用（郫県）



写真4-6 木製の来客用椅子（郫県）

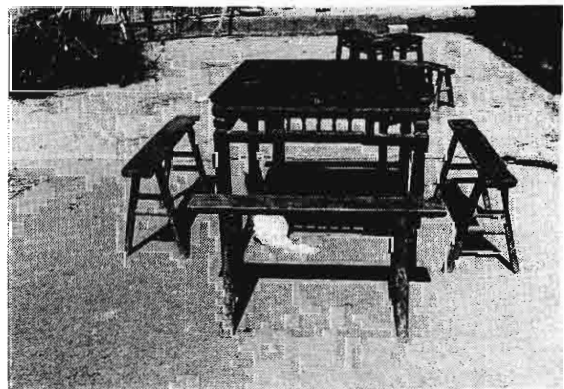


写真4-7 伝統的な食卓セット（彭山県）

代化の一端と位置づけるべきであろう。こうした現象は、日本の近代化とはやや趣を異にしている。すなわち、成都市近郊の農村における近代化は、欧米と共通する坐具の標準化を一方では進展させながら、一方では伝統的な竹という素材を使用する地域の文化を継承しているのである。換言すれば、中国大陸で形成された根強い伝統文化が、近代化の中でも息づいていると読み取ることも可能である。

成都市及び近郊の農村で製作される竹製の椅子は、造形技法を基礎にすれば、次の2種類に大別できる。

- ①焼き曲げを一部分にだけ施して組み立てるタイプ
- ②焼き曲げを全体に施して組み立てるタイプ

上記①の技法は、先に示した写真4-2、4、5の椅子である。焼き曲げを行う部分は、座面脇の4箇所である。また、実際には焼くという表現より、表皮を焙るという表現に近いものである。

②の技法は、写真4-9、10に示したものである。この技法の特徴は、①に比較してやや細い竹を使用し、曲面の部分はすべて焼き曲げで対応していることにある。こうした造形技法は、籐製の椅子と共通する部分も多く、中国で広く製作される竹芯に籐を巻いた椅子の技法と強い類似性が感じられる。②の椅子は、農家では殆ど使用されず、成都市郊外でも食堂での使用に限られていた。

4.5 まとめ

成都市近郊の農村で使用される座具を見る限り、農村の生活では、竹製の座具が近年急速に普及している。従来使用されていた木製の腰掛け類は衰退し、特に食事に使用される割合は極めて低くなっている。

木製の腰掛けは、概ね3種類の高さに分類され、食事用には最も高い50cm以上のタイプが使用されてきた。この腰掛けとセットで使用される卓子は、80cm以上にも達している。このことから、長く伝統的に使用されていた木製の食卓セットは、現在の椅子、卓子の標準寸法より、少なくとも10cm程度高かったということになる。

5. 陕西省漢中市郊外における椅子文化

5.1 地域文化の特徴

漢中市は西安より250km程度西南部に離れた場所に位置し、標高は300～400mで、四季の気温は日本の関東以西に近い。周囲の山は標高800～1000m程度で、2000m以上の山は150km程離れた秦嶺山地に存在するが、生活圏には直接関与していない。漢中市は南方に約100km進めば四川省との境となることから、陕西省でもかなり内陸部に位置する都市である。しかしながら、既に三国志の中にも地名が記されており、地域の文化は比較的早い時期から発達していたといえる。

調査は、市内から30～40km西部に位置する南鄭県



写真4-8 木製の腰掛け (彭山県)



写真4-9 竹製の椅子 (彭山県)



写真4-10 竹製の椅子 (彭山県)



写真5-1 竹製の椅子 (漢中市内)

ですべて行った。南鄭県の山地に位置する村落は標高 600 ～ 800 m 程度であるが、低い割には急峻な斜面を持ち、農業の機械化が遅れている地域もある。住民は漢民族が多数を占め、今回の調査はすべて漢民族であった。

5.2 漢中市内で使用される椅子

漢中市内で使用される坐具は、腰掛け類より椅子類の方が多く、木製、竹製、籐製の 3 種類が使用されている。木製の椅子類については、明確な特徴は認められないが、竹製、籐製の椅子類には地域特性が認められた。写真 5-1 は市内で使用されている竹製の椅子と腰掛けである。腰掛けの構造は、先に示した成都市の写真 4-2, 4, 5 の事例と似ているが、椅子の方は脚の構造が異なっている。腰掛けの場合は、脚を曲げて固定しているのに対し、椅子は台輪になる部分を曲げて対応している。構造の基本は同一原理で出発し、脚の構造が台輪へ展開したということになる。

竹の椅子は、他に写真 5-2 のようなタイプもある。この基本構造は写真 4-9, 10 と同一であることから、四川省の竹製椅子と強い連動性があるのではなかろうか。

籐製の椅子は、写真 5-3 のようなタイプである。座面は 40cm 程度の高さがあり、形態はヨーロッパのアームチェアとよく似ている。この椅子は、全体が籐で作られているわけではない。写真 5-2 の椅子と同様な焼き曲げ法を使用した竹のフレームに、細い籐を巻き付けているのである。外観からはすべて籐製に見える椅子も、実際は竹と籐という二つの材料で成立しており、こうした竹の特性を活かした材料の工夫は、ヨーロッパの影響ではなく、中国独自のものであろう。

写真 5-3 は漢中市内の市場で売られているものであるが、こうした製品は近郊の南鄭県の工場で作られており、今回の調査でも 2 社認められた。工場は小規模で、10 名～ 20 名程度の従業員で対応している。写真 5-3 の椅子類は値段が 100 ～ 200 元もするため、農村の生活費の 2 ヶ月分に匹敵することから農家では殆ど使用していない。竹芯籐編みという技法自体は、管見の限り蘇州市、景德鎮市等でも認められることから、漢中市で発達した技法と位置づけることはできない。

写真 5-3 の籐製椅子に使用する籐材は、2 種類に分類される。やや白色のものは、台湾や南中国で生育する籐であるが、調査地では少し茶色に見える材料を、青籐として区別している。中国の標準樹種名に青籐はなく、籐の仲間には該当するものが見当たらない。おそらく青檀 (*P. tartarinowii* Maxim.) の別名を青籐としているであろう^{※5)}。青檀の若い枝は、皮を紙の原料にも使用することから、細い枝を籐の代用品に使用していると推定される。工場では、青籐は湖北省の武漢市あたりから取り寄せている。このことから、写真 5-3 の椅子は他地域の



写真 5-2 竹製の椅子（漢中市内）



写真 5-3 籐製の椅子（漢中市内）



写真 5-4 木製の腰掛け（南鄭県）

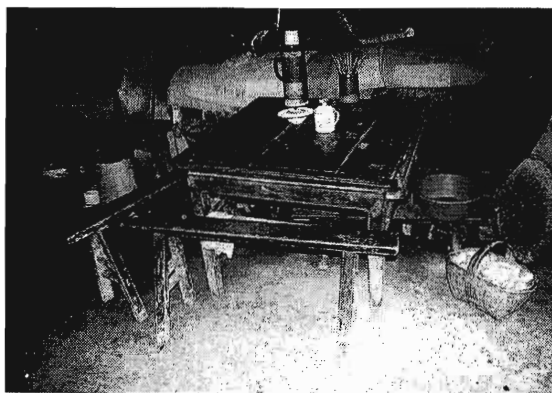


写真 5-5 木製の食卓セット（南鄭県）

材料を使用した高級な製品ということになる。

5.3 漢中市郊外の農家で使用される椅子

農家で一般的に使用される坐具は、写真5-4に示したような種類と個数である。腰掛けの高さは3段階あり、概ね50cm、30cm、20cmとなっている。椅子類は27～33cmが多く、40cm以上のタイプは少数使用されるにすぎない。腰掛けの高さで最も高いものは写真5-5のように52cmもあり、写真4-7の使用方法和強い類似性が認められる。但し、セットで使用される卓子は74cmで、四川省の卓子より6cm以上低い。こうした腰掛けと卓子のセットは、地域の持つ一つの特徴ということになる。

椅子類の高さが四川省より低い理由は、卓子とのバランスにある。すなわち、卓子の高さが51～63cmであることから、27～33cmの椅子とバランスを保っているのである。写真5-6は、高さ55cmの卓子と30cmの椅子との組み合わせである。こうした椅子と卓子の使用は大多数の家庭で認められる。

問題となるのは、写真5-5、6という二つの食卓セットの位置づけである。確かに、写真5-5は伝統的な食卓セットという風格を示し、特に卓子は細かな装飾を施しているが、写真5-6の食卓セットが必ずしも写真5-5の後に出現したと断定できる根拠もない。

図5-1は、北宋代に制作された『清明上河図』に見られる腰掛けと卓子である¹⁸⁾。当時の都であった開封近郊の風景を描いたとされることから、陝西省に近い地域ということになる。描かれた人物の大きさより、図5-1の腰掛けは、高さ30～40cm、卓子の高さは50～60cm程度である。少なくとも、写真5-5のような高さを示していないことは事実である。都市社会の飲食店の腰掛けや卓子類と、家庭で使用される食卓セットを同一概念で論じることにはできないが、北宋代の腰掛けと卓子が写真5-6に共通する要素があることは重要な意味を持つ。つまり、写真5-5の成立以前に写真5-6の食卓セットの文化が存在した可能性を残しているのである。

調査を行った南鄭県では、竹製の椅子は極めて少ない。最も多く見かける竹製の椅子は、写真5-7のような寝椅子である。こうした椅子の使用は老人が主体であろうが、地域に広く定着している。構造は写真5-2とよく似ており、農家で自作したものではない。

山地の農家では写真5-8のような椅子が見られた。高さはいずれも30cm程度で、構造は写真4-2、4、5に示した竹製の椅子と類似している。脚の部分は広葉樹の細い幹または枝材を使用し、外側の樹皮を竹と同じように活かして曲げている。但し、竹が焼き曲げ法を使用しているのに対し、写真5-8の椅子は湯で煮るという湯曲げ法で対応している。竹と木という異なった材料ではあっても、類似した構造を持つ椅子も存在するのである。



写真5-6 木製の食卓セット（南鄭県）

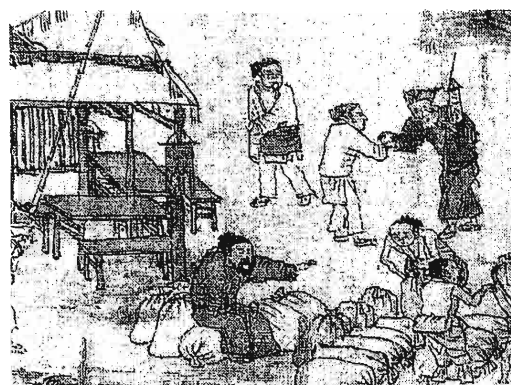


図5-1 『清明上河図』に描かれた食卓セット

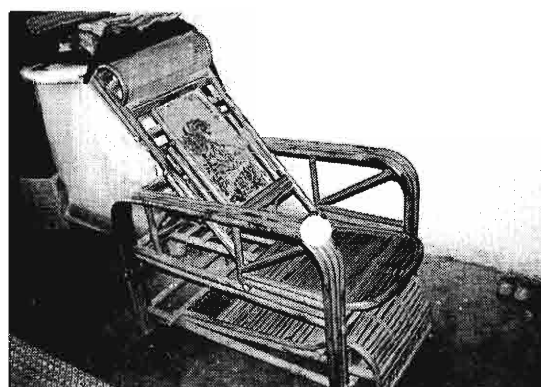


写真5-7 竹製の寝椅子（南鄭県）



図5-8 木製の椅子（南鄭県）

5.4 まとめ

漢中市および郊外の南鄭県で使用される椅子類は、先の貴州省、四川省よりやや種類が多い。腰掛け、椅子は3種類の高さに分類することが可能である。農家においては、座面の高い腰掛けから低い椅子に移行する傾向が認められる。但し、その座面の高さは、四川省に見られた40cm前後という寸法ではなく、30cm前後となっている。椅子と共に卓子の高さも50～60cm前後というタイプが多く、材質は特に高級感を示さない。生活の中で、来客専用の椅子というものとは存在せず、伝統的な加飾性の強い卓子類が新たに製作されることはない。

6. 湖南省邵陽市郊外における椅子文化

6.1 地域文化の特徴

邵陽市は、省都である長沙市より南西に300kmほど離れた場所に位置する。気候は温暖で、冬季においても氷点下になることは殆どない。標高は200m以下で、周囲は丘陵地が多く、高い山地でも500m程度である。

湖南省は竹の産地としても知られており、竹材を使用した各種の加工品が生産されている。邵陽市郊外でも小規模の竹林が認められる。

少数民族の生活する地域も湖南省に一部認められるが、今回調査を行った地域はすべて漢民族の農家である。

6.2 邵陽市郊外の農家で使用される椅子

邵陽市郊外及び邵陽県の坐具は、木製の腰掛け、椅子、竹製の椅子、寝椅子が使用される。しかしながら、所有する坐具の種類と個数は多少異なることから、下記的事例を通して検討する（寸法は高さ、()の中は個数）。

○農家A

- ・木製腰掛け 33.7cm(1), 52.8cm(4)
- ・卓子 83.0cm(1), 63.0(1)

○農家B

- ・木製腰掛け 19.5cm(1), 21.0cm(1), 54.5cm(1)
- ・木製椅子 29.0cm(6), 45.5cm(5)
- ・卓子類 82.5cm(1), 79.0cm(1), 54.5cm(1)

○農家C

- ・木製腰掛け 21.0cm(3), 47.2cm(4)
- ・木製椅子 36.8cm(4)
- ・竹製寝椅子 36.0cm(1)
- ・ソファ 28.9cm(1)
- ・卓子 72.0cm(1), 71.0cm(1), 51.0cm(1)

○農家D

- ・木製腰掛け 16.5cm(2), 37.0cm(16), 52.0cm(4)
- ・竹製椅子 20.0cm(1), 33.0cm(3)
- ・竹製寝椅子 35.0cm(1)
- ・卓子 86.8cm(1), 57.0cm(1), 52.0cm(1)

A～Dの農家の中で、最も坐具の少ない農家はAであ

る。この農家は、山地に位置し、耕地面積も少ない極めて貧しい生活をしている。家財そのものが少なく、台所での炊事もしゃがんだ姿勢で行っている。使用している食卓セットは、写真6-1のようなものである。この形式はA～Dの農家に共通しており、また四川省の成都市郊外、陝西省漢中市郊外でもしばしば見られた伝統的な形式である。

木製の腰掛けは、A、Cの農家では2種類の高さであるが、BとCの農家では3種類である。このことから、基本的には3種類と考えるべきであろう。

木製椅子は陝西省の漢中市郊外と同様に、柵構造のタイプと、竹の椅子の固定構造と共通する写真5-8と同じ写真6-2のタイプがある。この椅子は自作でなく、専門の職人が製作したものである。椅子の特徴は、上部二箇所施した補強にある。こうした隅を補強するという技法自体は、明式家具に広く認められることから、上手物の構造を日常品に応用したのであろう。専門の職人だからこそ出来る技なのである。

C、Dの農家で使用される寝椅子は、写真6-3に示したようにすべて竹製である。基本的には老人が使用するものであるが、こうした寝椅子は必ず一家に一つしか備えていない。

本来は寝台として使用しているため、先のA～Dの農家で使用している座具には加えなかったが、写真6-4の

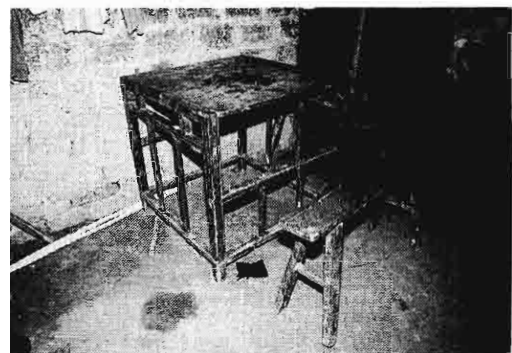


写真6-1 食卓セット（邵陽県）



写真6-2 木製の椅子（邵陽市郊外）

ように竹製の寝台を座具として使用している農家も多い。年中外に出しているのではなく、夏期を中心に日中縁台として利用している。すなわち、日中は縁台、夜間は寝台として使用しているのである。写真6-4は幅が80cm程あることから、寝台が主たる用途であろうが、60～70cmのタイプも少数認められ、縁台としての機能を当初より持たせている。大きさが異なるだけで、構造は竹製の椅子類と同じものである。

6.3 双峰県の農家で使用される椅子

双峰県は、湖南省の長沙市と邵陽市の中間に位置する。この地域には、清代後期に建てられた建築をそのまま継承している農家があったので椅子の調査を行った。調査した農家は、旧地主層の持つ建築様式を現在まで継承し、写真6-5に示した巨大な祭壇を備えている。しかしながら、この家では格式の高い古い座具は見当たらない。使用されている座具は次のようなものである(寸法は高さ、())の中は個数)。

- ・木製腰掛け 38.5cm(4), 42.8cm(4)
- ・竹製長椅子 41.0cm(1)
- ・竹製寝椅子 39.0cm(1)
- ・竹製縁台 38.5cm(1)
- ・籐製椅子 42.0cm(2)
- ・卓子 75.0cm(1), 68.0cm(1)

比較的新しい椅子に、写真6-6, 7のような竹製長椅子、籐製椅子がある。

写真6-6は高級品ではないが、背の部分に特徴がある。こうした意匠は伝統的なものではないと思われ。しかしながら、これまでの調査では見かけなかったものである。地域の新しい意匠形成と位置づけるべきであろう。

写真6-7は、竹芯に籐を巻いた椅子である。漢中市内で売られていた写真5-3とよく似た構造を示している。写真5-3と異なる点は、竹芯をむき出しにしている部分が多く、意匠性がやや少ないことである。より安い製品に仕立てることを目的としたことで、籐を巻いた部分を少なくしたのであろう。このタイプの椅子は、蘇洲市あたりでも街頭で売られており、都市社会との連動性を強く感じさせる。

6.4 まとめ

湖南省邵陽市郊外及び邵陽県で使用される座具は、種類も多いが、基本となっているのは他地域と同じように腰掛け類と考えられる。竹製の腰掛け、椅子も広く使用されているが、食卓とセット化される座具は木製を基本としている。湖南省のような竹の豊富な地域であっても、座具の価値は木製の方が竹製より高いと認識している人が多いようである。

邵陽市周辺だけでなく、双峰県、長沙市に近い湘潭県

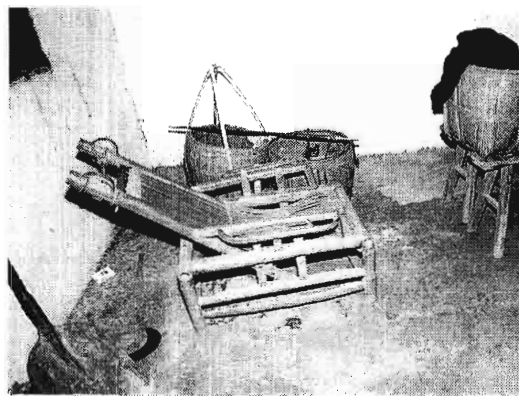


写真6-3 竹製の寝椅子 (邵陽市郊外)

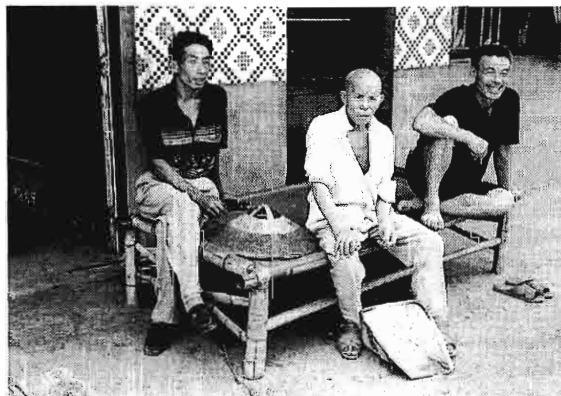


写真6-4 竹製の寝台 (邵陽市郊外)



写真6-5 祭壇 (双峰県)

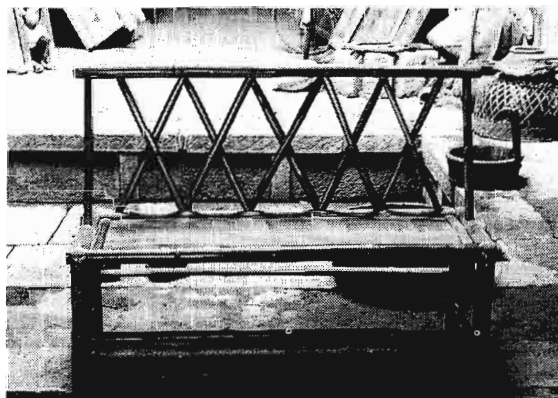


写真6-6 竹製長椅子 (双峰県)



写真6-7 籐製の椅子（双峰県）

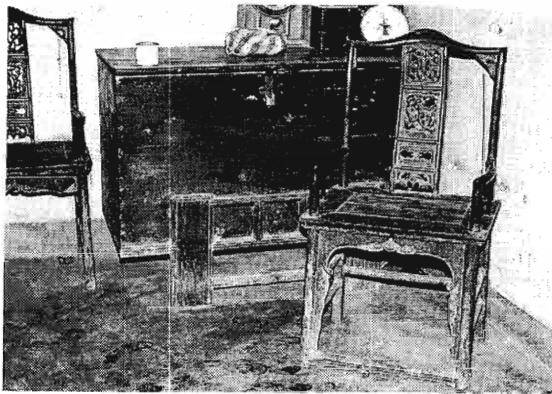


写真7-1 木製の椅子（西安市郊外）

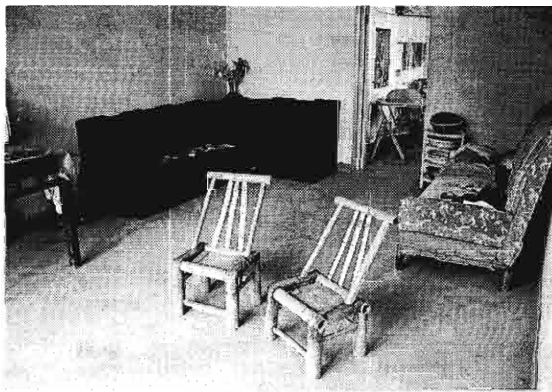


写真7-2 竹製の椅子（上海市郊外）

にも縁台と兼用の竹製寝台が認められる。このことから、縁台と兼用の竹製寝台は、湖南省の広範な地域で使用されている可能性が高い。

7. 大都市周辺における椅子文化

計画した4地域の椅子調査を実施する際、上海市、西安市という大都市を経由したことから、大都市周辺の農家も少数見て回った。その中で特徴的と判断した椅子類について少し触れてみたい。

西安市街地に隣接する農家においても、高さ50cmの腰掛け、80cmの卓子を伝統的に食事用の基本家具とし、

現在は高さ25～30cmの腰掛け、45cm程度の卓子も併用している場合が多い。家庭によっては伝統的な高い食卓セットは一切使用していない場合もある。こうした日常の座具と共に、古い歴史を持つ農家では、写真7-1のような清代に製作された高級な椅子を所持している。この椅子は明式家具にも共通する要素を持ち、極めて精緻な細工を施している。代々大切に保存してきたということであるが、西安市に隣接する地域であったればこそ、農家においてもこうした高級な椅子を所有していたのであろう。

上海市街地に隣接する農家では、西安市街地に隣接する農家と共通する食卓セットも認められるが、都市生活で使用される布張りやレザーのソファ類も広く使用されている。つまり、都市の生活文化が農村部にも既に深く浸透しているのである。写真7-2は、そうした農家の室内を示したものである。左端に古い伝統的な卓子が置かれている。但し、現在は食卓として使用しておらず、物置として利用しているだけである。手前には竹製の高さ30cm程度の椅子、右後方には布張りのソファ、後方にはレザーのソファをL字状に配している。近代的な調度品と伝統的な竹製の椅子が混在しているという室内が、上海の市街地に隣接する農家の実態ということになる。

8. おわりに

中国の貴州省、四川省、陝西省、湖南省の農村調査によって得られた資料を中心に、椅子と生活文化のかかわりについて考察した。その結果、次のような共通性と地域特性が認められた。

1) 座具の材質

- ・石の腰掛けは玄関付近という屋外に限られている。休息をとるためのもので、屋外でのコミュニケーションを形成する場にもなっている。
- ・木製の座具は生活の基盤となるものである。寝椅子類への利用が少ないだけで、殆どの用途に利用される。針葉樹、広葉樹の両方が使用され、簡単な塗装を施しているものもある。
- ・竹製の座具は、四川省の成都市郊外の事例を除けば、食事用に使用されることは殆どなく、休息用に使用されることが多い。竹製の座具だけを使用する地域は調査地に一例もなく、木製の座具の補助的なものという印象が強い。

2) 腰掛けの用途

- ・農村の座具で、早くから普及していたのは腰掛け類である。現在も腰掛けだけで生活する地域が山間地少数存在する。
- ・腰掛けの高さは概ね3種類に分類され、低いタイプは作業用に使用される頻度が高い。最も高い50cm

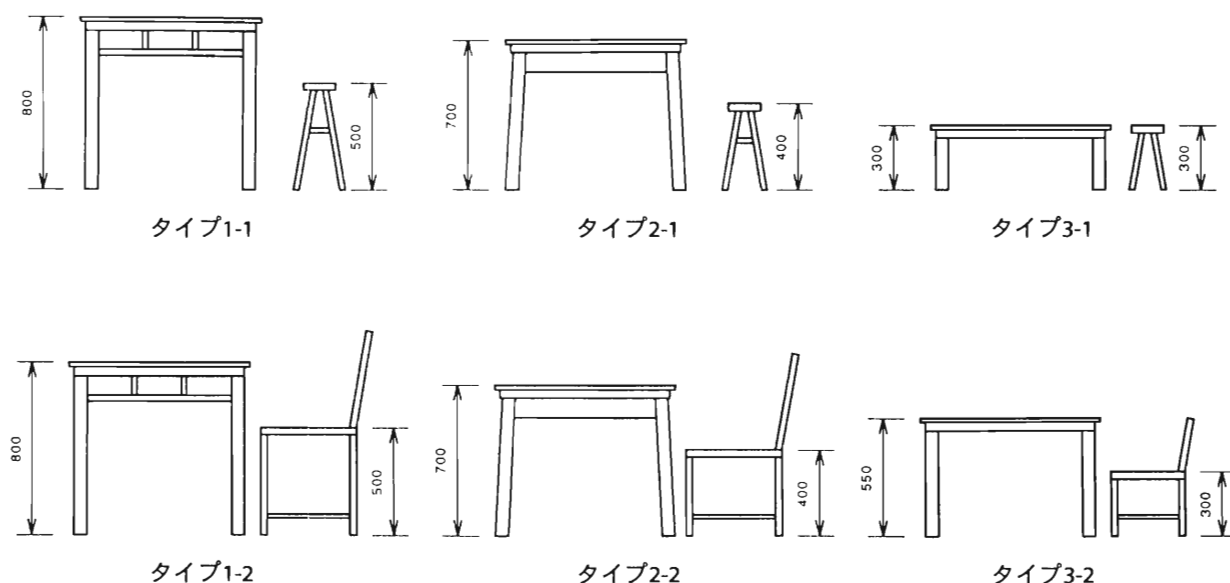


図8-1 卓子と座具の関係模式図

を超えるタイプは主に食事用に使用されてきた。

- ・材質は殆どが木製であり、低いタイプと縁台には竹製のものが使用される。

3) 椅子の用途

- ・伝統的な木製の椅子は、清代より一部の富裕層に普及していたようである。客用に用いるタイプも含め、広葉樹の硬い木材を使用している。構造、意匠は明式家具の系統を感じさせるものが多い。座面の高さは50cm前後のものが多い。
- ・現在日常で使用されている木製の椅子は、座面の高さが25～42cmあたりのものが多く、製作された年代は1960年代以降のものが多数を占める。また、特に高級な意匠を施したものはない。
- ・竹製の椅子は、座面の高さが30～42cmのものが多い。構造は2種類あり、一つはやや太い竹をフレームに使用するものであり、もう一つは細い竹を集成して焼き曲げを施したものである。後者は籐製品の技法と意匠と共通性が認められる。
- ・籐の椅子は、座面の高さが30～50cmである。構造は竹の芯に籐を編んだもので、やや高価なものが多く、農村で使用している事例は少数である。東南アジアで広く行われている太めの籐材を芯とする技法は一切見られない。

4) 卓子と椅子の関係

農村の生活において、卓子と座具は食事をするために欠かせない用具である。卓子と座具の関係は図8-1に示したように、高さを基調とすれば、基本的に3種類にまとめることが可能である。さらに、座具を腰掛けと椅子に分類すれば、合計6種類となる。中国各地の近年の傾向としては、タイプ1-1からタ

イプ2-2またはタイプ3-2に移行していく場合が多い。この移行に際して、欧米の標準寸法が関与している部分が認められるが、座面の高さが40cm以下のタイプ3-2の椅子に関しては、中国独自の展開と推測される。また、タイプ3-1は、貴州省の山間部のような僻地にしか見られず、やはり少しずつタイプ2-2またはタイプ3-2に移行していく傾向が認められる。

注

- 1)張鴻修：中国唐墓壁画集，嶺南美術出版社，pp.153，1995.3
- 2)小川裕充 監修：故宮博物院 第1巻 南北朝～北宋の絵画，日本放送出版協会，pp.86，1997.11
- 3)車政弘：中国の腰掛けと椅子－中国の常民家具デザイン，デザイン学研究特集号，第1巻2号，pp.28～35，日本デザイン学会，1993.7
- 4)石村真一：屋敷林とその利用，デザイン学研究特集号，第5巻1号，pp.10～11，日本デザイン学会，1997.5
- 5)成俊卿・揚家駒・劉鵬：中国木材志，中国林業出版社，pp.686，1992.3 青檀の説明では、青藤を陝西省の方言として扱っている。
- 6)前掲2)